FRONTIER
教育・研究の最前線

音楽の実学（サイヤンス）を拓く ―KGRI音楽科学研究センターの活動―

環境情報学部　准教授（KGRI音楽科学研究センター長）　藤井進也（ふじいしんや）

SFC設置の必修科目「環境情報学」の初回授業にて。音楽の科学と実践に境はない――そう体感をもって示すべく、自ら教壇でドラムを叩くようにしている（撮影：SFC総務担当）

「音楽の未知のために、未知の音楽のために」――この理念のもと、2024年12月、慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート（KGRI）内に「音楽科学研究センター（Research Center for Music Science：RCMuS）」を設立した。音楽がどのように生まれ、ヒトの脳・心・身体・社会に何をもたらすのか。その科学的解明と社会的還元に取り組むための、新たな拠点である。

なぜ、いま音楽の科学なのか。音楽は人類が古代から育んできた普遍的な営みでありながら、その仕組みや効用には依然として多くの謎が残されている。本センターには、音楽神経科学、音声学、精神神経科学、神経内科学、神経美学、計算比較音楽学、アート・ヴィジュアライゼーション、文化史などの研究者が文理芸術の枠を超えて集い、互いに音を合わせるように研究を推進している。若者の生きづらさを解消する音楽コンテンツの研究、パーキンソン病患者の歩行を支える音楽フィードバックの研究、グルーヴ感の多感覚研究、物心共創の観点から音楽芸術の起源に迫る研究――どれもが、知の最前線で社会と響き合う「実学」である。

福澤先生が唱えた「実学（サイヤンス）」とは、現実の課題に向き合い、世に役立てる学問のことだと、私は受け止めている。音楽の科学もまた、ライブハウスのステージから医療・教育・福祉の現場、そして一人一人の日常へとつながる実学にほかならない。SFC設置の必修科目「環境情報学」の初回授業では、私は自ら教壇でドラムを叩く。己の音を鳴らし、身体で感じ、心を響かせる――音楽の科学と実践に境はないことを、まずは体感をもって学生に伝えるためだ。研究室では、その先で待っている未知の問いに、学生たちと共に挑んでいる。

研究者とアーティスト、産官学民が音楽を奏でるように協働し、音楽の未知の力を未来へ紡ぎたい。これからも本センターから、一音、一音、新たな音楽の科学を鳴らし続けていきたい。